

□朝日新聞社朝日21関西スクエア主催

対談シリーズ「言葉ほぐし」第3回目

2012年10月27日（土）、大阪市北区の中央電気倶楽部で

ゲスト ノンフィクションライター最相葉月さん

ホスト 哲学者／大谷大学教授 鷺田清一さん

□対談

鷺田さん

本日のゲストはすでにご紹介ありましたように最相葉月さん。4歳からでしたっけ？5歳からでしたっけ？関西は。

最相さん

3歳からです。父の実家が神戸で、生まれたのは東京なんですけれども。父の仕事の関係で3歳から。

鷺田さん

今日は最相さん、ものすごい綿密・緻密、そしてとことんの調査・インタビューをして、普通の人がちょっと思いつかないような領域を解きほぐしてこられた方で、「わかる」という事についていろんなお話を伺おうと思うんですが。

鷺田さん

さて、最相さんは大学出られてこのあたり（大阪市北区）でお仕事を？

最相さん

そうですね。淀屋橋の広告会社に。淀屋橋で3年間勤めて、25歳で上京しましたので。もう23年東京ですから、ほぼ半分が東京になりました。

鷺田さん

今「純と愛」という朝ドラがちょうどここ中之島が舞台になってまして。

今日もこの辺り歩かれたのはお久しぶりでしょう。

最相さん

もうちょっとわからなくなりました。まず駅前がわからなくて。すごい工事をしていますし。どこに出たら良いかわからなくて思わずタクシーを乗ってしまいました。

鷺田さん

ここまで！？遠回りしないと来れないですよ。

最相さん

そうです。遠回りだったと思うんですけど、もう方角もわからなくなつて。

鷺田さん

そういうもんですか。

最相さん

帰省はしょっちゅうしているんですけど、オフィス街を歩くということはないんです

ね。友達と会ってもだいたいターミナル駅なので。わからなくなりました。

鷺田さん

最相さんのエッセイ「なんといふ空」という本の冒頭に出てくる

最相さん

「わが心の町 大阪」だったと思いますけれど、出てくる男性の名前が本当に「大阪君」といまして、その事を書いた1200字あまりのエッセイが映画化されたんですけれど。映画は「ココニイルコト」という。

鷺田さん

2001年の映画で旧姓真中瞳さんという方の映画ですね。その相手役の大阪君は心臓病でお亡くなりになられる。その人が最相さんの後輩なんですけれども、まだデビューして、すぐくらの堺雅人さん。

最相さん

まだ無名だった頃の堺雅人くんが演じてくれまして。たくさんこのあたりが出てくるので、もしよろしければご覧になって下さい。

鷺田さん

少しずつ、今も売れ続けている。「ココニイルコト」というビデオでございます。これも舞台は中之島界限ですね。

今日は「わかる」ということなんですけれども、わかるということが今我々の時代の中で特に本当にわかるってどういうことなんだろうか、或いは本当に人の事ってわかるんだろうかという問題についてです。実はスライドにありましたように、東日本大震災の被災地を、彼女自身がというより、主として神戸の医療チームに同行されてずっと調査を続けてらっしゃる。

最相さん

阪神淡路大震災の時はすでに東京に行って勤めておりまして、揺れ自体は経験していないんですよ。それで当日いろんな交通機関を乗り継いで神戸に戻りまして、自分の家は無事だったわけです。友人のお家は全壊したり、同級生も亡くなったりという中で、本当に自分にはもう何もできないという事と、当時もうすでに駆け出しのライターだったんですけれど、自分には取材出来ないという思いで3日目くらいで東京に帰ったんですよ。すごく卑怯だったと思うんですけれども。帰ってから突っ伏して寝込んでしましまして、街を歩いて東京のオフィスビルなんかを見ていると、ビルが真ん中でへしゃげる、つまり真ん中へんが潰れたやつですね、あの像が頭の中でぐるぐる回って、たぶん今考えるとこれは震災のストレスだったと思うんですけれど、2ヵ月ぐらい寝込んでいました。

そのようなときに、当時仕事をしていた先輩が、当時子どもの本を編集していたんですけれども、「自分の地元がああいう事になったんだから、最相さん1年間くらいとりあえず取材したらどうか」ということを言ってくれまして。それで通って結局3年ぐらい、子どもたちを中心に取材をしていたんです。そういうことがまず私の中にありました。

心のケアという言葉がこれだけ広まったのも阪神淡路大震災の時だったんで、あの時に人々のケアをしていた人たちが、では16年後の東北で何をするかという事を凄く見届けたいと思って、兵庫県の心のケアチームに取材させて頂いたという。昨日もそのチームの方にお会いしたんですけれど、まだ支援は続いておりますね。

鷺田さん

去年の暮くらい、今年の春でしたか、「心のケア」という講談社現代新書で半年分程の報告と、それから加藤 寛先生のインタビューが本になっていますが、その東北の事、そしてこの「わかる」ということについては後半にじっくりお聞かせ頂くこととします。

それで、前半ではですね、私は最相さんをなんていう書き手だと思っています。まず、実質的なデビュー作、単行本としては競輪の取材でしたよね。

最相さん

「高原新伍、「逃げ」て生きた!」というんですけれども。逃げるという戦法がありますね。馬でもよく言いますけれども。先頭を走ってそのままゴールするという事ですね。

鷺田さん

競輪から始まるんですね。競輪選手を追っかけるといふ。ご自身も売店で。串焼きをおばちゃんがつけてくれるというおっさんみたいな食事もなさっていたみたいで。

最相さん

競輪の取材をしたきっかけは大阪時代の会社の上司が大変好きで教えてくれたっていうのがきっかけだったんですが。とにかく書きたいとか取材したいとか、この世界を一人でも多くの人に知ってほしいという思いから、300枚ぐらい書いてしまっただけ。

鷺田さん

それは別に本になるアテもなく。

最相さん

ちょっと賞に送ったりもしたんですけれどもダメで。

鷺田さん

二十何歳くらい？

最相さん

まとめたのが26～8歳くらいだったと思いますけれども。持ったままウロウロして。

鷺田さん

周りおっさんばかりでしょ。

最相さん

そうですね。競輪場に行った時にスポニチの記者の方に声をかけられて、それで「何してんの？」と尋ねられて、「〇〇で取材して書いたんですけど」って言ったら「それ読まして」って言われて。それがきっかけで出版社の人に紹介してもらって初めての本になったという事ですね。

鷺田さん

まずデビュー作が競輪の有名な選手の追っかけというのもすごいですし、あと最初に彼女を有名にしたのは「絶対音感」という本ですよ。それまで絶対音感というのはみんなすごい天才的な領域の人達のものであって、僕らは無縁だと思っても、羨ましくもあるし怖くもある、そういう絶対音感についてきちっとした本はそれまでなかったんです。初めて彼女が絶対音感の世界を、分厚い本を作って、そしていきなり賞を貰われたんですけれども。その後がこの近くの企業がやっている「青いバラ」。絶対音感とどういう関係があるのかと思いますけれども、「青いバラ」をやられて、その後はなんと東大の応援団、タイトルは「東京大学応援部物語」。近大に行くとか大体大とかだったらわかるんですけど。

最相さん

何ですか。

鷺田さん

常勝の反対で、常に負け続ける。あんまりバンカラもないはずの東京大学。東京大学の応援団を取材されて、また本を1冊作られて。その前後に私もインタビューを受けたんですが、彼女はこういう仕事と並行してものすごく長期間で生命倫理とか遺伝子治療とか再生医療とか生殖医療とか今回の iPS 細胞とかをずーっと取材されておまして、私も政府の審議会に入ったんですけれど、それにもずーっと傍聴されておまして、それで会議が終わってからインタビューを受けたりということで、これは彼女がある意味では取材期間としては一番長い。

最相さん

そうですね。クローン羊「ドリー」が誕生、オープンになったのが97年ですから、その前後からずっとこの再生医療、生殖医療については取材しています。

鷺田さん

怖かったんですよ。審議会終わってもう帰ろうかなと思ったらエレベーターの前でつかまって、ものすごい論理的な極めて緻密な質問を。「今の会議はどうだった？」って。

最相さん

あのころは「明日にでもクローン人間が誕生する」みたいな切迫感がありましたので、それはもう最先端で取材しなきゃいけないサイエンスのテーマだったんですね。サイエンスなんだけれど、今回の原発にも繋がりますが、技術を私たちは手にしたからにはどういう風に使うのかと、それをどういう風に考えるのか、人間の身体をどこまで操作して良いのかみたいな、非常に倫理とか哲学を考えなきゃいけない、そういったテーマだったのです。

審議会を傍聴していると、(専門的で)分からないことばかり言う人の中で、鷺田さん、あと島菌先生の御言葉も分かりましたけれども、お二人か三人ぐらい、言葉がわかる方がいらっしやったんです、私なんかでも。仰ってる内容が。それはすごく大事で、「ああこの人に話を聞きたい」ということで、命というテーマでずっと取材を連載をしていた時に、インタビューをさせて頂いたというのが、ゆっくりお話をするきっかけでした。

鷺田さん

そして先程紹介にもあった星新一さんも。これも映像をご覧になってびっくりされましたでしょ。ご遺族から切抜きからメモから全部お借りになって読み込まれて。これは4つくらい賞を。朝日新聞だから大佛次郎賞しか紹介してなかったですけどね。本当は講談社ノンフィクション。

最相さん

一番嬉しかったのは実は（朝日新聞さんすみません）SFファンの人達の「星雲賞」というのがあるんですけど、それを戴いたのが一番嬉しかったです。

鷺田さん

推理小説作家賞も。すごいですね。

最相さん

それは、星新一のおかげなんです。星さんがそれだけノンジャンルで物事を考えていた人だったので、ジャンルの枠を越えた人だったので、いろんなところから戴いたんだと思うんです。本当に星さんのおかげで戴きました。

鷺田さん

そして今紹介にあった、昨年からは心のケアの問題。私も哲学者としては風変わりなテーマを結構扱ってきて、人が論じてないテーマばかりやってきて、ファッションであるとか顔であるとか聞くこととか待つこととか、あんまり哲学者が正面から付かないテーマ、初めて自分がやるテーマをやってきたんですけど、自分がやった範囲がこれくらいだったとしますと、最相さんはこんなですよ。「青いバラ」と「東大応援団」ってどういう関係があるのか、「絶対音感」と「星新一」と。で「競輪」でしょ？

最相さん

私自分の仕事をそんな風に褒められることが無かったので、本当にすごくここに座りづらいんですけど。

鷺田さん

最初にぜひ僕がわかりたいのは、この誰も論じていないものばかりですよ、それまで。これはどうやってこういうテーマ、これは何か常人には見えない、すごい底流で繋がっているものがあるのか、それかたまたま、まるで向こうから「お前、論じてくれ」と事柄の方が迫ってきたみたいなものですか？

最相さん

多くの事は私はすごく自分で鈍感な人間だと思っておりまして、専門家ではないという意識が非常に強いんですよ。だから学者の方々と同じところで仕事をして、とても太刀打ち出来ないという意識がありまして。素人だったら素人なりに持つ抱く疑問ってあるわけですね。

例えば、「青いバラ」だったら英語の古いウェブスターの辞書で【blue rose】というのは【impossible】の意味があるんです。書かれているんです。私、国会図書館まで調べに

行ったんですけども、古い辞書で【impossible】と書かれているんです。何故「青いバラ」は不可能なのかということ、ちょうど隣の会社が遺伝子操作で青いバラを作るという報道が流れていた時です。

それで私がクローンの取材を始めていた時だったので、これは何かいけないことをやろうとしているのではないのかという意識がすごく働きまして、ずっとバラの育種で一代を築いてこられた鈴木省三さんという、もともと京成バラ園芸の育種家の方なんですけど、その方の所に行きましたら「【impossible】と言う意味があるという事は、それまで【possible】可能にしようとして頑張ってきた、努力してきた人がいるという意味ですよ」という風におっしゃったんです。なるほど、そっか。だからそのトライしてきた人たちのことをちょっと取材してみようというって、青いバラ作りにかけた人たちと、現代の最先端の遺伝子技術というのをずっと書いた。だから縦軸は育種家の流れで、横軸に今動いている先端の技術を書いたのがこの本なんです。

東大応援部につきましては、神宮球場でたまたま六大学野球をプライベートで観に行っておりまして、東大の学生席の隣に座ってたんですよ。早稲田と戦ってまして、点数の差は忘れたんですけど、18対2か3くらいで、9回裏で学生たちが「まだ逆転できるぞ！頑張れー！」ってすごい応援してるんです。東大生ですよ。「9回裏で18対2で何で逆転できる！？」って。「普通に考えたらおかしいやん！」と思って。この子たちは一体どういう学生だろうと思って。実は私ちょっとストーカー気味のところがあるんですけども、終わってから正門で待っていたんです。彼らが出て来るのを。それでお客さんたちが出て行った後に、重い荷物、旗とか太鼓を持って団長、主将と若いリーダーの子たちが首相の後ろについてちょこちょこ歩いて、主将はわりと偉そうに歩いて私の前を歩いて行ったんです。「この子たちを取材したい！」とすごく思ったんです。

鷺田さん

要するに、まずは変人として映ったわけですね。

最相さん

変人というか、何考えてるんやろうという。

鷺田さん

僕も実は応援団好きで。切ないですよ。特に団長は切ないですよ。大きい球場でやっている時に2人だけ試合を見られない人がいるんですよ。敵と自分との団長。みんな応援している人の方を向いてやっているわけですからね。試合がわからないんですよ。その人の喜んでる姿を見て自分も喜ぶということで、本当は自分は、勝ってる、逆転している1番良い所が見られない。なかなか切なくて。

最相さん

究極の自己犠牲的な立ち位置で。自分が応援する側が強くなければ応援してはいけないというそういう考え方を持っていました。

鷺田さん

阪大は強くなってたしダメなんですね。対象としては。

最相さん

団員が強かったってことですか？

鷺田さん

ちょっとこの頃全国大会で強かったんです。私のかつての勤務校は。

最相さん

野球ですよ。

鷺田さん

野球は……。総合点で。

最相さん

総合点で。二度ほど胴上げをされたことがあると。

鷺田さん

そうなんです。阪大の総長で二回胴上げされたのは私が初めて。

例えば遺伝子レベルでもいいし、それから東大の応援団の人の、あの人たちの命の輝きとか必死さってなんだろうとかという。例えば「青いバラ」でもそうですけど、生物学的な意味ではなくて、広い意味での命の輝きみたいなのに興味ある、そういうのはこじつけになりますか。

最相さん

知りたい。何故かを知りたいと。最初はすごく違和感とか、その世界ってどうなってるんだろうとか。だからやっぱり最初はものすごく違和感とか疑問ですね、それが先にあってそれをつかむための一つ貫くテーマがあればそれで書ける、というような感じでしょうか。

鷺田さん

ただ、すごいなあと思うのは、いわゆるノンフィクションライターとしてのお仕事って普通はある意味で同時代の誰もが気になる事柄とか、今メディアとかジャーナリズムで話題になっていることとかその裏側とかという風に、同時代の事を攻めているのに、確かに皆、同時代ではあるけれど、ちょっと時代からテーマがぶっ飛んでいますよね。この発想はどこから？

最相さん

本当に自分が気になることをやってきただけなんですけどね。あまりそんな戦略的なことはないんですよ。だからこの辺でいいじゃないですか、私の話は。

鷺田さん

誰かもう一人ノンフィクションライターが最相さん論を書けばいいんですね。わからなくて。違和感があって、知りたい。すごいなあと思うんです。

それともう一つやっぱり見る人であり、アテンドするというか、マラソンで伴走者のよ

うな見ることとか、じっと横から見ていることとか、或いは伴走する、いろんな物の横についてる、黙って、しかもじっと待ってるという。そういうところがすごく共通していますよね。

最相さん

東大の子達とは本当に伴走して、彼らのキャンプで後ろからついて走っていました

鷺田さん

そこまで、本当に！？走るんですか？

最相さん

一緒に。長野県の合宿に行って走りましたね。だから本当にそういう風に仰って頂いてすごく嬉しいんですけども、やっぱり私自身は常に黒子であり聞き手なんです。やっぱりライターというのはそもそも自分を出してはいけないという事を教えられて。

鷺田さん

誰に？

最相さん

例えば編集のプロダクションにいた時はですね、「あなたの考えはどうでもいいんです」と。「この人がどういう風に言っているかそれを書けばそれで十分です」とか。あなたの意見は、名前は別にここで関係ないから「私は」というのは要りませんとか。自分を消すということを常に訓練される、それがライターなんです。それで素晴らしい仕事をされている方もたくさんおられて、今有名になれている作家さんで無名時代、「ゴースト」というか、聞き書きをしてきたという人たちは結構いらっしゃるんです。自分を消すというのは身についてしまっているというか。

だからこそ取材した相手のことに全部合わすというんでしょうか。昨日もある方のところ、夜ずっと私聞き役として取材をしていたんですけども、そういう仕事なんです。だからテーマはたまたまちょっとぶっ飛んでいるように思われるんですけども、実は読んで頂けるとなんかすごく誰かをじっと横で取材してるんだとか、星新一の時はもう亡くなっておりますから、下書きとか日記とかを見ながらこちらへんに星新一がいました。だから最後はもう同一化してしまうというか、それくらい相手の立場に立たないとなかなか見えない、そういう仕事かもしれませんね。

鷺田さん

その距離の取り方、離れて他人事みたいに見るんじゃなく、ある至近距離で、しかしくつつかないで考えるというようなことなんでしょうか。最相さんの、いろんなエッセイとかも読ませて頂いたら、例えば子供の時に自分のいとことかがお父さんとキャッチボールしてたりとかプロレスごっこしてる時に「なんで男の子だけ？」みたいな。どうして私たちは見ることしか出来ないのかというような、そういうなんか自分だけ外されているみたいなことをふっと「あれ？なんで？」という感じで書いてらっしゃるエッセイとか。或いはそういう男たちではなしに、自分が女性であるということについてもなんか距離感をも

ってらっしゃるような感じがしたエッセイがあって、ブラジャーのことを書いてらっしゃるのがあって「あれっ、こんな突き放して自分の下着について書ける人ってなんやろう」と思ったりですね、あとは変なんですよね、ジャイアント馬場と兵庫県の甲子園である東洋大姫路とタイガースとジュリーにのめり込んでるんですよね。

最相さん

東洋大姫路、土貰ってきました。

鷺田さん

そういう人なのに、文章になると独特のそういう自分を書いてらっしゃって、夢中になっている自分。一番驚いたのは、さっきも言いましたけど、おっさんなんですけれど、家ではつぶ貝の缶詰をあてにしてビールを飲むのがお好きで。たまに料理するというとチーズとのりをはさむサンドイッチ。究極はですね、ちょっとひどいと思うんですが、すき焼きの残りを・・・

最相さん

ああ！それは違いますわ。それは私がすごく複雑だった話ですよ。

鷺田さん

よそで。

最相さん

よそでそれをやられて。

鷺田さん

すき焼きの残りを刻んでチャーハンにして、それをお客さんに出すんですよ。

最相さん

お客さんとして戴いたんだけど、「昨日の残りやけど」って言って。ちょっと複雑。

鷺田さん

最相さんは最初に鍋をした時に、ふぐちりでみんな食べた後の骨を全部出して、それを揚げて、それでみんなにまた酒のアテにされた時に、みんなしゃぶった後でしょ？それでものすごい違和感を・・・

最相さん

本当にそういう経験が初めてだったんで最初だけ違和感が。今はもう平気ですよ。

鷺田さん

やっぱりおっさんですね。

最相さん

おっさんになりましたけれど。最初はびっくりしたということで。

鷺田さん

彼女の書かれるものってある意味でそのジェンダーを超えているところがあって。つまりおばさんのなところは全然なくて、かといってキャリアウーマンっぽくも全然なくて、自分の性というものと、子供の時からちょっとした距離にもものすごく気になってた。

最相さん

何ですかね。自分では分かりませんね。

鷺田さん

解剖医ですから。ものすごくその距離が絶妙だなという感じがして、いろんな物論じられている時の。

最相さん

ずっと「変わってるね」ってよく言われました。中高時代も。学生の時も誰か言ってきましたね。弟に言われたこともありますし。

鷺田さん

一番それが正確かもしれないですね。

最相さん

普通の人には10年後20年後のことをきっちり計画して生きているんだ、みたいな。明日の事も分からない、みたいなことを言っていたので「それはどうなんだ」ということを弟に言われたことはありますね。

鷺田さん

その微妙な隔たりというのがすごく読者の方に支持されてると思うのは、今日ご紹介の中にはなかったんですけど「ビヨンド・エジソン」といういろんな現代の、現代に限らないですけど、科学についてのいろんな評論も書かれているし、生命倫理の物とか結構高校生とか若い読者がサイエンスの本を読んで、私はある意味では文系の学者がちゃんと仕事をしていないからだと思うんですよ。

最相さん

理系じゃないんですか？

鷺田さん

文系です。遺伝子治療の問題とか生殖医療の問題一つとってもそうだけど、理系の人はある種自分の専門の中でとにかく知りたいたいと思って、或るいは功名心もあるでしょうけど、そうしている時に文系の人がある意味というのをもっと発言しないといけない。文明史的或いは人類史的な意義とか。そういったものを文系の人にはポーンと対象から大きな話をするけれども、今科学者の方が直面している問題で、彼ら自身もよく見えていない。例えば生殖医療なんかでも本当に倫理的な問題の一つとっても、そもそもこれはして良いことかどうかが分からないような事に対して、もっと文系の学者というのはその問題をクリアに言わないといけないんですけども、なんかポーンと外から批判するか或いはわからないからって関心持たないからと言って、ちょっと文系の学者は怠惰なところがあるというふうに思っています。

僕がその最相さんのある種の本を、理系の研究者の人まで含めて学生とかがよく読むというのは、ある意味では文系の先生がやっていないことを、さっき「自分に分かる言葉で」

と仰っていたけれども、理系の研究者の人達が逆に最相さんの本を読んでいると自分達にもわかる言葉で批評してくれてるっていう風に思われるんじゃないかと。

最相さん

学者さんの世界はよくわかりませんが、今回ノーベル医学生理学賞をとられた山中伸弥先生、もう6年くらい前からインタビューさせて頂いたり、度々お会いしてるんですけれども。今回いろいろ報道された論調といいますか、それは山中さんがスポーツマンであるとか、洗濯機のストーリーとか、なんかちょっと本筋とは違うところばかりをクローズアップされるじゃないですか。だけどやっぱり山中先生がなぜ iPS を作ったかという、やっぱりその前提として ES 細胞といって受精卵を壊して万能な細胞を作るというのがその時は一世風靡していたんです。だけどそれは不妊治療なんかで余った、捨てる受精卵を破壊しないといけない。

鷺田さん

廃棄ってすごい言葉つかいますよね。

最相さん

そうです。廃棄って。でもそれこそ鷺田さんが国の委員会でディスカッションされていた時代ですけれども。

そのことが山中先生は、もし自分のところの夫婦の受精卵はもう差し出してそれを研究に利用してほしいくらいだけでも、一方で自分にも子供がいると。じゃあ受精卵は捨てるから「物」と言って良いのかということそれは違いうだろうということをお考えになって、そういう科学が作ったある踏み込んだ領域から。そこで文系の理論をするのではなくて、もっとサイエンスのクリエイティビティを發揮するところで乗り越えられるんじゃないかと言うところで iPS が生まれたわけです。

体細胞を使うという、それを初期化するというで今回実証されたわけですが、逆転の発想なんですけれども。やっぱり科学は科学自身で倫理の問題を乗り越えていくんだなということ、私は山中さんが2006年に初めて iPS 細胞を発表された時にそれをすごく感じました。

自分がそれまでやっていたホームページがあるんですけれども、生命倫理についてディスカッションをするために設けたホームページをそこで更新を停止することを決めました。というのはそのタイトルは「受精卵は人か否か」というタイトルだったんですね。それを問わずとも iPS だったらそれに近いところまで実現できる可能性があるということ、その時点で山中さんも見抜いておられたし、私もこれまでの倫理的な議論と違う段階にきたという事をその時にすごく実感しましたので。

だから何を申し上げたいかというと、科学者自身にきっちり話を聞き技術をj知ること、そこから私たちへ跳ね返ってくる問題が一番クリアに分かるんですね。文系の学者の方の怠慢とおっしゃいましたけれども、もしそうだとしたらそのディスカッションが、理系と文系の間の対話がアカデミズムの世界ではまだまだ不十分だったということなのかなと。

ちょっと扉を叩いて科学者の方に話を聞けば、彼ら自身も今は直面している問題というのがあるはずなんです。それをすくい上げさせて頂くというようなお仕事ですね。

動物実験なんかでやっぱりマウス一匹殺すのもみなさん手が震えるんです、最初は。その震えってだんだん慣れてしまって、首をキュッと頸椎を捻って殺すんですね。それが出来なくて辞めた人もいるぐらい、やっぱり最初はものすごく皆さん胸を痛めながらやるわけですね。だんだん慣れていって麻痺していくところで問題が発生したりするわけですね。その頸椎を捻った時の苦しい葛藤を教えて頂ければ、そこに科学の中にどういう問題や解決していない科学者だけの力では答えが出ないことがあるかというのがそこから見えてくると思うんですね。

鷺田さん

それは本当に大事な事で。今回福島第一原発の事があって、原子力工学ってそういう独立の専門分野があるわけじゃなしに、ある種の総合科学みたいなもので、電気は電気の人としてシステム制御をやる人はそれで関わっていくわけだけど、その中でテレビで言う「原子力工学者」という人達は電気事業者の人とか国と一体になって、世論を誘導してきたかのようにずっと言われて。そういう面も確かにあるんですけども、逆に一般の人からしたら、今回その専門の研究者への不信感みたいなものも「きっと魂胆はこっちだろう」とか「本当はこっちにもってきたいんだろう」とかが透けて見えるようなところがあって、ずいぶん不信感が高まってきたんですけども。

そんな中で私は一つだけ、彼らももちろんいろんなことを反省というか、原子力研究の構造的な問題で自分達もわかってたんでしょけど、一つだけ彼らの言葉の中でああそういう事だったのかと思ったことは、ある原子力工学の推進派の人達が「文系の先生も一緒に考えてほしかった」って言ったんですよ。

つまり文系の先生方というのは、事が起こってから、こんな構造があったとかいろいろと対局的な批判をするんだけど、その時に本当に原子力工学の中身について考えたり、あるいは原子力工学に関わっている人が実はどういう不安を持っているとか、本当にこれで良いんだろうとか、いろんな問題を自分でも感じているところがある。それを自分たちで、本当に渦中であって、いろんな政策とかと絡んできた時に、どう判断して良いかわからない、そういう時にこそ文系の研究者の人に一緒に考えてほしかったと言われてたことがあって。

そういうことがあって僕ちょっと生命倫理の問題でも大局的な話はするけどもうちょっと理系の方が文系の事も調べるのと同じくらいに、文系の人の中身に入って勉強してそして何が問題かというのを一緒に考えるという姿勢が足りない感じがしていて、そういう意味で、最相さんがある意味で空白地帯を埋めて下さってきた。

最相さん

一時期、「星新一」を書いていた時代なんですけれども、生命科学については「来たお仕事はとりあえず全部受けよう」とか「大学で講義やって下さいと言われてたら行こう」とか、

自分がその技術サイエンスとそれ以外の社会の関係を繋ぐという、全然お金にはならないんですけども、そういう役割は一定期間心に決めてやっていたんですね。おそらく自戒を込めてなんですけれども。この国のサイエンスジャーナリズムであり、理科教育とか、本当に根底のサイエンスコミュニケーションと言うのが全くなかった。あったとしても非常に狭いところで一部の人達にしか共有されていなかった。本当に不幸なことが起きました。今回の原発の事故というのはそこが専門家だけに任せてはいけないうし、私たち自身の生活が脅かされるという事を骨身に染みて皆さん分かったと思うので、これからはそういう分からないという事自体が無責任というか、一度は考えて勉強するということがすごく自分の力になるし、勉強することによって初めて発言が出来るわけですね。わからないと批判とか攻撃になってしまう。そこはだから大きく一般の方々を今回変えたのではないのかなあという風に思います。

鷺田さん

今のご発言凄いい大事だと思います。何らかの形で責任持って関わっていく為にはまず理解するということから。

で、今日はやっと「わかる」にいきましたね。わからないといけないということなんです。前半で最相さんのいろんな多面的なお仕事をずっと。流れているもの・変なものが好きだと仰っていましたけれども、こういうお仕事をされてきたということイメージして頂けたかと思うんですが。

これからは今日のテーマである「わかる」という問題に入っていきたいと思うんですが、実は今分からないで批判するのは攻撃になってしまう、暴力になってしまうという話ありましたけれども、今回の被災地での支援の活動の中でも激励が暴力になってしまうようなケースというのは結構ありましたよね。或いは今日のテーマで言うと「その気持ちわかります」とか、相手の気持ちがわかるというふうに思ってしまう事自体が暴力になってしまうという、その問題はものすごく繋がってるという風に思うんですね。

それで今日は後半ではこの今、現在進行中のお仕事で東北心のケアというかたちで、神戸の医療チームがずっと継続的な支援活動をされていて、それに伴走されている今の仕事をまずちょっと写真で説明頂こうかと。

最相さん

私はだいたい取材は一人で動くんですね。写真は撮らないんですよ。「今回こういうのがあるんだけど、写真ありませんか」と言われて携帯で iPhone で撮った写真ばかりなんで画質も良くないし、「最相さんが取材活動している写真ありませんか」と言われたんですけども一人だからないんですよ。たまたま、東北って広いですから友人に車を出してもらって相馬の方に言ったのが唯一私の姿が映っていますので、それを用意しました。

鷺田さん

さっきのマスクのやつですね。

最相さん

これは私が最初に入ったのは仙台の宮城野区という沿岸部なんですけれども、ここに兵庫県の心のケアチームが入りまして、ちょうどこの黄色くなっているところが浸水した地帯で、特に宮城野区の中野栄というところに兵庫県チームは拠点を置いて活動をしていました。これは荒浜ですね。宮城野区の隣ですね、若林区荒浜の方で実は遠くの方でご覧になれるかわからないんですけれども、薄らと高層ビル群が見えてると思うんですが、あれが仙台の中心部なんです。つまり本当に落差が激しいというか、津波の被害というのは阪神淡路の時もそうでしたけれども、津波は本当にこの16号線という道路があるんですけれども、それよりも海側はほとんどやられてしまったという状況ですね。

これが兵庫県チームのある第5陣ですね。中野栄のコミュニティセンターを拠点として活動されてた人達です。

これはその中に心の相談室と書いてあるんですけれども、別に治療とかやっているわけではなくってこの人達がそこに荷物を置いているというだけであって。やっぱりなかなかそういう方々は現れませんし、兵庫県チームは自分たち自身が阪神淡路の経験がある方がたくさんおられますので、無理やり心のケアを押し付けるような活動は一切されませんでした。

これはその宮城野区の方々に家を流された方もいらっしゃいますし、そうでない方もいらっしゃるんですけれども、あやめの会という踊りのサークルがありまして、ほとんど直後から皆さん集まってこうやって運動されたり踊ったりされて、この方々が実は地域を回って心のケアではないんですけれども、なにかよろず相談みたいなことで自分たち自身で回ってそういう地域の方々のケアをされてるんですね。

これがそのメンバーの方々です。

これは気仙沼で、なんでこの写真を持ってきたかと言いますと、道の前面に車が通る道路にこうやってぬいぐるみとかすごく置かれているんですよ。それはおそらく自衛隊の方々が見つけたところで人形だけを前に持ってきて分かるようにされているのかなと思いました。これも見つかった品々ですね。写真アルバムがあります。

これも気仙沼なんですけど、一見何にもないようですが、洗濯を掛けるところの上に車が乗っていて、これはその避難所にもなったホテル観洋という所からかなり高台のホテルなんですけど、そこから撮りました。

これは5月ですね。牡丹桜が咲きまして、仮設住宅が出来たところです。

これは私のiPhoneの待ち受け画面なんです。何かと言いますと、福島県の伊達市ですね。田んぼで、実は友人のご実家なんです。この田んぼのお米は結局どなたの口にも入らなかったんです。今は特定避難勧奨地点に指定された所と指定されていない所で、亀裂というか問題が起こってしまっていて、原発の紛争解決の組織に仲介申し立てが出ている地域ですね。非常に悲しいことが起きています。

これは南相馬の原町区大亀という所のちょうど計画地域だったところのゲートです。これの直前で撮りました。

これは南相馬で一番被害が酷かった萱浜という所です。墓地が、全部墓石が流されてしまっていて、私が行った時これは去年の11月なんですけれども、一組の家族が自分の所の石を探して歩いておられました。

これが阿弥陀経の倶会一処と読むんですけれども「死んだら先に死んだ人たちとまた会うことが出来る」という意味で、元々は家が絶えたりして、誰も参りに来てくれない方々のために作られたものなんですけれども、私が行った時にこれがこうやっておかれていたのが、たぶんここに来られた方が、倒れてたと思うんですけれども真っ先にこれを組み上げて、皆さんを悼んでるのかなというふうな気がして写真を撮ったんですけれども。

これは相馬です。後でたぶん話になると思うんですが、相馬市というのは実は精神科病院が一つも無いんです。これは歴史的な理由なんですけれども。けれども、今回福島県立医大だとアメリカのお医者さんや海外在住日本婦人会というのがあるんですが、その方々の寄付で相馬にメンタルケアの施設を作りましょう、拠点を作りましょうという事で建てられたメンタルクリニックなごみと心のケアセンターです。これがその中です。

これは相馬港です。これは1月なんですけれども、こういう状態で今もまだほとんど変わってないというふうに聞いております。気仙沼なんかもとても復興が遅れて土地のかさ上げがようやく進んだぐらいと聞いておりますね。

写真は以上で実はそれ以降は郡山とかいろいろ入っているんですけれども、先程申し上げたように私は写真をめったに撮らないので、ちょっと手元にあるのだけで失礼しました。以上です。

鷺田さん

この東北の特にメンタルケアということで、私は実はこの春に最相さんにびっくりするような話を聞きました。ちょっとややこしい科学技術振興調整機構とかいう、要するに自然科学とか技術の研究のためにいろいろ支援する機構、独立行政法人で、そこが震災の事で学会の会長さんもいらっちゃって、最相さんとか私も参加させて頂いたんですが、シンポジウムをやりました時に、本当に立ち話なんですけど、二人とも時間が無かったものですからステージで話ただけでお別れしたんですが、その時に控室でちょっと最相さんが今なさっている活動について聞いたときにふっとその直前にご覧になった避難所の話をされて。

2月ぐらいに、彼女が兵庫のチームと一緒に行かれたある避難所の表に貼り紙がしてあって、なんと「心のケアお断り」って貼り紙がしてあったと。もうびっくりしまして、私はある意味で当時だと16年前ですけど、神戸の震災があった時に、やっぱりあの頃はまだボランティアという言葉は身につけていない、あるいは心のケアはまだ言われていない時代だったけれど、あの厳しい体験の中から十数年かけてやっぱり神戸をきっかけにボランティアの文化或いはケアの文化というのが日本の中である程度きちっと育ってきたというか、神戸のいろんな経験というのがこの被災地の支援にもものすごく上手く活かされていたと思うんですけれども、そんな中で、「心のケアお断り」なんていう貼り紙がしてあると

ということがもうびっくりして。一番必要なことなのに。それを聞いてかなり衝撃を受けて、そしてそのことをずっと考えてたんですけれども、その頃のお話を。

最相さん

まず心のケアと言った時、みなさん何を思われますでしょうか。たぶんなんか嫌な感じしませんか？「そんなもんケアしてほしくないわ」という。内面に踏み込まれるような、そんな簡単に分かってたまるかという思いがあると思うんですけれども、私も最初にその言葉を聞いた時にすごくそれを感じておりまして。だからその阪神淡路で生まれた心のケアってじゃあ本当は何だったんだろうという事を知りたかったんですね。

実際に取材をすると、世間に報道されている心のケアが意味するものと、実際の心のケア活動が全然違うという事が私は取材をしてわかったんです。それは兵庫県の方たちの活動の実態は、まずは精神科医療の補完という仕事なんですね。つまり入院している患者さんたちを他の病院に移送する、突然パニックの状況ですから、急性的に発症される方がどうしてもいらっしゃるんです。そういう方々を診察して入院させる、措置入院と言う手続きがあるんですが、そういうことをされる。そのために震災発生直後から大体1ヶ月ぐらい行かれる。それがまず最初の心のケアチームのやったことはそういう急性期の活動なんですね。

その急性期が過ぎると、今度は避難所を回るわけですが、そこでは眠れないとか、悪夢を見るとか、子供が思い出して泣いているとか、阪神の時は地震ごっこみたいなのがあったんですが、今回は津波ごっこがあったり、子どもたちがストレスが高まるあまりに出てしまういろんな反応があるんですけれども、そういうのを親御さんはやっぱり心配しますよね。だけど先生たちは、「それはこういう時には自分たちが言葉で怖いと言えない代わりにごっこ遊びでそれを解消してるんだ」ということをご説明してあげると親御さんそれだけで安心しますし、そういう本当に日常レベルの事をケアするというか、それが心のケアになってくるんですけれど。

それでもやっぱり心のケアチームは嫌だと言われることが多いので、途中から早々の時期に内科の先生方とか歯医者さんとか、そういう先生方がまず避難所を回られますよね、そこから情報を戴いて、これは自分達がでないといけない、やっぱり睡眠薬がいるだろうみたいになった時に出て行くという。第一線から退いて支える、保健師さんたちが地域を回る中で、あのおじいちゃんが家が使えない、ライフライン途絶えてるのに家は無事だったからいるけれども避難所ではいっぱい救援物資が来てるけれども食べられないけれども、栄養が細ってしまってどうしたらいいんですか、みたいな話があると、それを彼らは精神科医でお医者さんですから、身体も診れる方々ですからそこでアドバイスしたりとか、後方支援的な活動になっていくんですね。

つまり震災後のフェーズによって心のケアもどんどん変わってきますし、ある段階までは心よりも生活支援なんですね。生活支援が十分に確保されて、その次に安心とか安全な感覚が次に確保されたときに初めて PTSD という心の、よく報じられますけれども、ああ

ということが問題になってくるんです。

普通に心のケアと言ったら「お困りのことありませんか」といって心の中に踏み込むようなイメージがありますけれども、実際はそうではなくて、段階に応じてお医者さんが出ていく場合もあれば、ソーシャルワーカーの人が出ていく場合もあれば、臨床心理さんが出る場合もあれば、保健師さんが行く場合もある、そういうすごく多様なんですよ。そういう活動を総称して心のケアといって、今は震災から1年8ヶ月経ちますけれども、今はまた全然違う活動になっていって、それはもう地元の生活支援をやってらっしゃる人達が仮設住宅とか回っておられるので、その人たちのバックアップを心のケアチームがやったりしているんです。そういうことを実際の具体的な活動内容をお知らせしないと、やっぱりイメージだけで「心のケアお断り」になってしまう。

鷺田さん

本を読むだけでもリアルだなあと思ったのは、この兵庫県以外のチームで、それこそ心のケアお断りみたいな反論にあった人達というのは、本当のところ表現上手いなと思ったんです。縄跳びをやっている時に、どのタイミングで入ったらいいのか分からないという。その自分もケアの活動をやりたいんだけど、どこのタイミングでどんな声をかけていいのかも分からない。それを縄跳びでいつまでも入れないという。それでどんな言葉をかけたらいいかわからないというところで「お気持ち如何ですか」とか「頑張ってくださいね」とかつい言うてしまうんですよね。そうすると「言わなくてもわかるだろう」という思いもあるし、それから先に言われると言えなくなってしまうという気持ちもあるし、それから今仰ったようにステージがだんだん変わってくると、最初はみんな日本中から頑張れ、東北とか頑張ってくれという言葉、ああみんな心配してくれていると最初の直後の時はそうなんですけど、時間が経ってくると、「これ以上何頑張るんですか」となってくる。「頑張れ」という言葉が残酷に聞こえてくるんですね。そういうことがすごくリアルに描かれていて、その中で最相さんが一緒にいらっしゃって聞いて下さっている言葉なんですけれども、神戸のチームというのはそういう意味ではお断りではなしにずっと入っていかれた、それは最相さんが書いていらしたんですけれども、神戸のチームは見事なまでに何も言わなかったって。

最相さん

そうですね。何もしないんですね。「何もしないでいるという事は勇気がいるんです」という事を仰った先生もいらっしゃって。テーブルが汚れていたらそれをそっと拭き取るくらいの、そういう気遣い。黙って、それくらいで良いんだと。なんかやろうとしたら、やっぱり何か失敗してしまうわけですね。特にあそこにも書いたことでもあり鷺田さんが「語りきれないこと」でお書きになってたことなんですけれども、やっぱり東北の人達と関西では全然被災の表現の仕方が違うんですね。これは東北の避難所におられた方が兵庫県チームの人に言った言葉なんですけど、「関西の人はみんないいわね」と。「全部口に出して言える」と。「だけど自分たちはやっぱり黙ってしまう」と。私も南相馬に行った時にある

方に言われたんですけど「みんな思っても言えない。全部胸に収めてしまうんだ」という事を仰っていて。「なんでもこう喋ってたまに不幸をギャグにしてしまう方が関西にいらっしやると思うんですけど、そういうふうには出来ないんです」ということを仰って。

だから仙台の心のケアチームはピンクのジャンパーを着て活動していたんですけど、その人が寄ってきただけで「あそこの嫁はピンクの人と喋ってた」という事が噂になったりして。非常にやりきれなかったり、ピンクのジャンパーはある時から脱ぎましたとチームの方も仰っていましたし。相馬は、先程精神科医療過疎地域だということもありまして、やっぱり馬追いの非常に気高い武士の精神を尊ぶ文化がありますので、メンタルな問題というのは秘かに自分たちで解決するものだという、そういう考え方があるんです。明治初期の相馬事件という相馬藩のちょっと精神疾患があった方を巡る事件があるんですけど、そういういろんな要素があるんですが、メンタルクリニックを作ろうとしても「相馬はやめとけ」という感じで周りの医師、他の内科医の先生方に言われて止む無く南相馬にしたとか。だから今回みんな相馬に行った患者さんたちは、宮城県の方に行くか南相馬に行こうとしたんですけど、南相馬が原発の問題で入れなくなりましたので、1200人くらいの患者さんたちが全部いろんなところに散り散りバラバラになりまして、未だに戻る入院先が無いという事で今大変な問題が起きています。

鷺田さん

神戸から来ましたということで、避難所の方も神戸の人だったら何も言われることはない、神戸の腕章があるだけで。

最相さん

あっち（兵庫県）も大変だったわね、ということで。

鷺田さん

その神戸の人ですらいかに難しいかという話を聞くというか、ケアということが難しいかというのは、ある男性が書いていらした、神戸の比較的スムーズに入ってきたチームですら保健師さんが羨ましかったと言って。つまり保健師さんだったら自分のプロフェッショナルなお仕事があるから、行ってお気持ち聞くとかではなく「とりあえず血圧計っておきましょうか」というふうに、ずっと体に触れたりできる、あれが羨ましかったという風に言っている青年もいましたよね。

最相さん

精神保健福祉士の青年が言っていたんですね。自分は医者じゃないのでそういうことが出来ないけれども。

鷺田さん

兵庫県の腕章に救われたと。それほど本当に大変で、さっきも最相さん仰ったように「お気持ちわかります」というような慰めの言葉のつもりでも禁句なんですよ。

最相さん

「お気持ちわかります」が最大の禁句と言われております。

鷺田さん

「そんな簡単にわかってたまるか」というね。こういう事って別に震災とは限らずいろんな日常でもそういうことありますよね。苦しい時に人に聞いてもらう、そもそも聞いてもらうとこまで行くのが大変で、そんなものは本人は寧ろ忘れたいんで、一時もそんなこと考えないでいたい、でも誰かに聞いてもらうとやっぱり楽になるんじゃないかという思いもあって、喋りたくない事と聞いてほしい事と引き裂かれてないところがありますよね。

だから、そもそもそういうふう引き裂かれている、それからちょっと話し出しても「こんなんで本当に通じるだろうか」とか、或いは「こんな言葉だったら軽く取られないだろうか」とか、自分の口を開いてもその言葉、感触を確かめつつ、ああ通じてるかなとか軽くとられてないかなと確認しながらしか喋れないから、ものすごく訥々とした、沈黙を挟んだことになってしまうんですね。

だから語る方もものすごくしんどくて、そういう時に「お気持ちわかります」と言われたら、「そんな簡単にわかられてたまるか」という気持ちになる。ところが聞く方も聞かれる方もしんどいんですけど、聞く方も結構しんどくて、うーんってこう黙ってしまわれてしまった時に次の言葉をかけようがないし、それから場合によっては被災地じゃなしに友達に話を聞いてもらう時なんかでも、そんな簡単にわかられてたまるかという思いもあるのと。聞く方からしたら分かるけど分かりたくないという。友達とかがいろんな知り合いの人とかのいろんな悩みとか聞いてあげる時って、その人のために一生懸命聞いて力になってあげようと思うけれども、聞く方もちょっと抵抗がある時があって、いろいろ勝手な言い草というか、ちょっと自分としてそのまま「そうだね」と言えないようなこともしょっちゅう出てくるじゃないですか。そういう時にわかるけどわかりたくないという、聞く方にも聞いている最中に抵抗が出てきたりというようなことがあって、難しいですね。

最相さん

それは取材をしてるとしょっちゅうそういうことが起こるわけですね。やっぱり最初はわかりたいと思ってお話を聞くんですけど、やっぱり話を聞いても言っていることは分かったけど、だけどやっぱりわかったとは言いたくないというのは、それはもうサイエンスとかの取材をしてるとしょっちゅう起こることかもしれませんね。

やっぱりその技術がどういう風に使われていくかもうちちょっと想像してほしいという想いとか、技術自体の内容はわかるけれどもそれだけではないでしょという思いもあったりとか。私はそういう分野の取材をしていますけれども、例えば最近問題になったこちらの市長さんの問題なんかについても、やっぱりわかろうとしたい、言ってることはわかるんだけど、だけどわかりたくないという葛藤の連続ですよ。我々の仕事はそういうことが常にある職業なのかなという。必ずしもこのシンパシーを持ってるから取材してるわけじゃない場合もたくさんありますので、わかるわからないの狭間に立たされて、ウロウロすることはよくあります。

鷺田さん

わかるということにも、頭でわかるというか理解するという事と、理解出来るという事と、それから腹の底からわかる、納得する、理解する、頭でわかることと納得することってやっぱり次元が違って、今わかるけどわかりたくないというのは、理解は出来るけど納得は出来ないという事だし、逆もありますよね。「あんたの言ってることは難しくて分からんけど、納得はした」というのはありますでしょ。その先生の姿勢において。

最相さん

たぶん山中先生はそれで今ものすごくファンを増やしてるんじゃないですか。iPSの事はわからないけど、この先生の言っていることは信じられそうだというふうに皆さん思っただらっしゃると思うんですね。やっぱりそれってすごく大事なことで、ちょっと山中さんの話にいてもいいですか。

山中さんって、謙虚な方じゃないですか。謙虚さというのは人柄なんですけども、全てを回転させる原動力だと思うんです。例えば、それは説明責任であり、自分の研究に対する客観性を保つ、ちょっと引いて見るということも謙虚さですし、山中チームって、ほとんど大学院出たての若い子達がいたわけですけども、やっぱり彼らのフォロワーシップというのが今回素晴らしかったわけですよ。

それはやっぱり山中先生の謙虚な姿勢ゆえだし、患者さんに対する姿勢で「まだ臨床応用は一例も出来ていません」と今回の受賞の時にコメントされていましたが、研究がわからないけどもその姿勢、謙虚さというのがすべてを分からせてしまったという。その力というのを今回非常に感じて、無理矢理「わかる」に引っ付けているわけではないですけども、わかるという事は必ずしも中身を理解するという事とは次元が違うんだなあという事を感じました。

鷺田さん

それはもう科学者のみならず政治家でも言えますよね。あの政治家が言っていることを全部一応「なるほど」と理路整然と、「理屈はわかるけど・・・ちやうやろ」という。だから「わかる」ということはそうですね。この2つの次元ってやっぱり違うんですよ。頭で理解出来る事と本当に納得出来る事と。となると納得出来る時って結局どういう事になるのか。山中さんの場合は研究の中身ではなく、研究に取り組む姿勢とか或いは研究する時のその人の他の人達との関係であるとか。

最相さん

鷺田さんと対談させて頂いて、『聴く』ことの力の中の一節で「注意を持って聞く耳があつて初めて言葉が生まれる」という一節があつたと思うんですけども、それは納得する為にはやっぱりわかりたいと思う、わかりたいと思うという自分と、そこで最初で原発の事でも言いましたけれども、わかろうとする努力・知識をまず得る、勉強するっていうんでしょうか。自分の納得に至るまでの努力をしていないと、そこまで深い所までは落ちないような気がするんですね。自分側の問題として、山中先生の謙虚さとチームワークとかいろいろ出てくるものがもし納得まで落ちるとしたら、やっぱりそれはそこにきっちり

向き合って、この技術がどういうところに応用されてどんな人たちが救われるのかという事を新聞でも良いですけども勉強されて初めて深いところまで落ちてくるのかなど。それはキャラクターというか、先生のキャラクターだけではそこには落ちないと思うんですね。こちら側の問題じゃないかなという気が非常にします。

鷺田さん

ということは納得が起こるのはある種の共同作業のようなものなんですね。納得出来てその人が偉いからとか、そういう立派だとかそういう話ではなく、もちろんその面もあるけれど、それをそういう風に捉えられる自分側のある種の問いかけ、関心とかですね。すごく大事な事を発見出来たと思います。「わかる」というのは頭で自分がキャッチすれば良い事だけど、納得出来るというのは共同作業だという事ですね。

最相さん

鷺田さんが平田オリザさんのお話の中で、ディベートと対話の違いを書かれてらっしゃいましたね。ディベートというのは自分の考えが、ディベート後に話し合った後に変わっていたら負け。対話は自分の考えが変わらないと意味がない、という一節があったかと思うんですけども、やっぱりそういう相互作用、ディベートではなくて原発の問題に対してはディベートやってたんじゃないかという気がすごくするんです。対話が無かったんではないかと。私たち非専門家も本当にあの技術を納得したいと思ったら、やっぱり自分自身の勉強も必要ですし、相手の言っていることに聞く耳を持つ、対話してそれで理解する、同じ意見は持てないにしても、ああそういう意見もあるのかと言う風に腑に落ちるといふか、そういう事をやらないといけないんじゃないかなど。

鷺田さん

平田オリザさんに教えてもらったんですけど、話し合うって2種類ありますでしょ。ディベートというものとダイアログ、対話というのと。平田オリザさん、この違いものすごくシンプルに上手に教えてくれたのは、ディベートでは話相手と話し合う前と後で意見が変わっていたら負けになるんですね。最後まで論破して、相手に意見を変えさせたら勝ちになって自分は最後まで意見を変えたらいけないんです。それがディベートの勝ち負けなんですけど、ダイアログ、対話というのは逆で、その人と話す前とそれから話し終わった後で自分の何かが変わっていなかったらそもそもその人と話す意味がないと、その違いだと教えてくれて、ものすごく分かりやすかったんですけど、今の納得の話はある意味で自分とその人の間に対話が起こるといふ事なんですね。

最相さん

生命科学の取材をしていた時、鷺田さんもそうだったと思うんですが、本当にその連続でした。ディベートだけど最後は対話が必要だという事だったと思うんですね。

鷺田さん

その一番劇的な話を私、実はまた人に聞いたことあるんですよ。私が今日は朝日の宣伝をすると、十数年前に日本で初めて哲学カフェというのを十数人の人と私が司会をして

やる、あれを大阪の朝日カルチャーセンターで十数名の方とやりました。哲学カフェは名前しか言わないので、皆さん職業も何も明かさないういきなりストレートに話を始める、対話を始めるんです。

第一回目は忘れもしないんですが、人のことがわかる、人の気持ちがわかるという事はどういう事か。まさに「理解」というテーマだったんですが、その時に身分を全然知らない中年のおじさんが来てて、仕事帰りみたいな背広でネクタイ姿の人がいきなりすごいディープな話をして、「調停ってあるでしょ、離婚とかの」、家裁の人だったと後で分かったんですが、調停っていうのはほとんど離婚の話なんです。これはとにかく「お前があんなことしたからだ！」と相手の非を責める、互いに自分は悪くない、相手が悪いということをやたらと何ヶ月も応酬して、二人ともくたびれてしまって「もうあかん、この人と話しても絶対あかん」と両方が断念したら解決が無いと別れる、断念してやっと調停が出来るわけですけど、その両方が「もうあかん」と「もう話すことが無い」と思ったその瞬間から対話が始まるんですって。その瞬間、言いたいだけ言って、俺には非は無い、私には非はないと。決裂したその瞬間に、「ようこんなしんどい話、相手も嫌がらんと毎回付き合ってくれたな」という風に、決裂して初めて相手への想像力がよくこんなあの人と付き合ったなという、そこから初めて相手の立場から物を見るというのが始まると仰っていて。まさにそこでぐるっと変わられるんですね。いきなりそんなディープな話をされたんで、後は皆発言しにくくなって。こんな軽い話をしたら哲学的でないって言われるんじゃないかと。それを思い出しました。

だから人に話を聞いてもらって楽になるときって本当は分かってもらえなくても、理解されてなくても聞いてもらえただけで良い、別にわかってもらわなくて良いんだと。聞いてもらったという事で、もう納得してしまうというか楽になるというのは、きっとそういう対話が起る共同作業の中に自分が入れたという事なんですかね。

最相さん

実は私の祖父が調停員でした。検察官だったんですけど、退官後、家庭裁判所でずっと離婚調停をしておりました。

鷺田さん

最相さんがこんないろんな物書きはるというのは、お父さんが映画助監督でしょ？おじいちゃんが調停員、おじいちゃんのおじいちゃんが前島密。切手の。

最相さん

曾曾曾祖父くらいなんですけどね。だけど正妻の子じゃないんですよ。非嫡子。妾の子です。

鷺田さん

そういうとこのが返って親子の対話出来るんで、自分の子どもだったら返って対話無しという。

最相さん

だけど、血は関係ないですよ。

鷺田さん

血は関係ないですか？でもこの「青いバラ」とか「東大応援団」を見てると、郵便切手、映画監督・・・

最相さん

関係無いですよ。

鷺田さん

でも最後に、そういうことを含めて神戸のチームっていういろんなことをやっぱり16年間の中で本当にリアルにわかってらしたんでしょうね。

最相さん

やっぱりその加藤寛先生って、今兵庫県の心のケアセンター長が仰っていたんですけども、とにかく自分たちは御用聞きだと、黒子であるという事を常に後輩たちに仰っていましたね。だから、今もうそろそろこちらからの支援もだんだん細くなって行って、もう現地の方は現地で心のケアセンターも続々と宮城にも出来ましたし仙台にも出来ました。だから現地で出来てきて、そこでまた人々が育ってきているんです、今。

今の現場はまた阪神淡路とは全然違う問題も抱えているので、それはその人たちの力でやって行って自分たちはもうだんだん縮小していくと昨日も仰っていましたが、決して出しゃばらないという事を徹底しておられましたし、おそらく私凄くこれは皆さん誇りに思われて良いと思うんですけども、これだけの災害国で、心のケアの文化が今、奥尻の津波の時から調査が始まっていて、心のケアという名前ではなかったですけど、だんだん育ってきて阪神で火がついて今それが現場に活かされて、後進がどんどん育ってきているんですけど、こんな国たぶん世界中で日本だけだと思うんです。台湾大地震ありましたが、日本から兵庫県のチームが行きましたし、中国の四川にも行きましたし、スマトラも行きましたし、それはとてもソフトの力が育って大きな誇りに思われて良いと思います。

鷺田さん

震災後の新聞ですごいと思ったのが、医療チームの田中究さんの、更に先生で中井久夫先生って神戸の時は司令塔に立たれて、その方が今回東北大震災の2日後か3日後にとにかく全ページ震災報道の中で、エッセイという言い方はいけないかもしれませんが、書かれていて、すごい事書いていらした。

食い物の話を書いていらして、要するに冷たいものは3日、カップ麺で5日、もうそれ以上はもたないと。一週間経ったら美味しいもの食べないと絶対もたないという事を、ものすごくきっちり、的確にハッキリそれをメッセージとして被災地の人に送ろうと思ってやってらっしゃるんですよ。それもすごい経験なんだなと分かって、今度その最相さんの本で、心のケアのを読まして頂いたら、やっぱり田中さんは、医療チームは行ったら必ず晩は宴会をされていて、そうしないと、もたさないといけないからというのでね。

最相さん

自分達も普通の診療を中断して行かれて、ほとんど徹夜の状態で行っているからやっぱり疲弊するわけですね。それで人の話を聞くっていう事は聞きっぱなしだと、鷺田さんも書かれていましたけれどどっかで抜かないと、体がね、アースが必要なんですね。だから毎晩、仙台の残っている飲み屋さんに行ってバカ話をして抜くと。で翌日また気合を入れて現場に入るというのをしながら自分で自分自身を保つと。だけどさすがにお腹を壊したりする、初めての若い看護師さんたちは帰り、道々お手洗いに飛び込んでいたけど、京都の日が見えた時だったか、お腹が治りましたと言って急に治ったという話も仰っていましたね。

鷺田さん

京都タワーがそういうのに役に立ってるんですか。嫌な塔ですね。

最相さん

やっぱりそれだけ緊張して皆さん現場に入られているので。

鷺田さん

納得という話に納得出来てありがとうございました。

質問の時間

質問.

今尼崎の事件が毎日毎日見たくないのにテレビも新聞も。先程自分で理解しないと、確かに批判して攻撃ばかりになると仰っていて、私もなんであんなことが出来るんやろう、人じゃないんじゃないかと思うんですけど、最相さんはそういう事をどういう風にお考えですか？

最相さん

それはまず分からないということですよね。彼女の事は。だけどきつとやっぱり彼女のこれまで生きてきた、生まれから遡って一つ一つ歩んできた道を辿ると、どこかでやっぱり歪んできたんだらうなという。それは私は取材をしておりませんので何とも言えないんですけども、何かもし私がそういう週刊誌の現場で記者をやっていたら、たぶん行って来いって言われたと思うんですけども。それは地どりというか現場の同級生とか近所のおばちゃんとかそういう方々のお話を聞いてどういう暮らしをしてきたかという、そういう事実を積み重ねていくしか手は無いというか。それは想像することで辿りつけるものではありませんので、だからやっぱり取材というのは必要、ジャーナリストが今たぶん現場をウロウロしてると思います。

質問.

2年半ほど前に自費出版をしまして、本屋で売れないから営業をする時に、電車で人が本を読んでいたら必ず声をかけて、しおりを作って自分でそれを「本読んでるから使って

もらえたら」ということで宣伝して、男性は稀でほとんど女性で年配から若い方に言ってます。それで若い方に「しおりどうですか？」と言った時に「大丈夫です」と言われるんです。私の感覚で「大丈夫です」と言われたら「あ、大丈夫ですか」と言うんですが、そういう事を私の娘に「大丈夫ですってどういうことなの？」と聞いたら、たぶん私が思うに人を傷つけないように今の世の中で「大丈夫です、要りません」ということなんですけどね。あるいは興味ないと。大丈夫ですって最初何かなと思って分からなかったんです。で、いろいろ聞いて、若い方の「大丈夫です」というのは対人関係で相手を傷つけない思いがあるのかと関心があったんです。対話の事について関連しているのでちょっと教えて頂きたいです。

最相さん

それは私も時々使っちゃうことがあります。「結構です」という意味であったり「ご心配なきようどうぞお気遣いなく」という意味であったり。本当はそういう風に申し上げれば良いんでしょうけど思わず「大丈夫です」って言っちゃう時ってあるんですよね。どうですか、そういうのって鷺田さんの方がコメントして下さりそうなのかな。

司会の方

言葉もこの頃ずっと変わってきていますので何とも言えないと思うんですけども。私もアナウンスやっていますけど、時代とともに変わってくるけれども変えてはいけない部分もあったりというのはこの頃感じますけれども。

ちょっと私一つだけお聞きしたいんですけど、今日は女性のお客様が7割ぐらいいらっしゃるんですね。本当に最相さんの御本もたくさんお読みになってる方もたくさんいらっしゃると思うんですけども、女性だからではないんですが、ノンフィクションライターとして20年やってこられて、月並みな質問なんですけど、やってきて良かったと思う事とか、それからいやまだまだ模索段階だというのがあったらお聞きしたいと思います。

最相さん

常に不満なんですけど、自分の仕事はあんまり満足出来なくて、常に。今この瞬間が一番しんどいというのをずっと20年間やってきているという意識なんですけど、それでもやって良かったと思うのは、すごく綺麗事かもしれないんですけども、読者の方が感想を下さって私は「絶対音感」を出した時に、大変賛否両論があって、いろいろ誤読とかもあったりしたんですけど、100人いらっしゃれば100人の読み方があるんですけども。最初に来た手紙が大学ノートを千切って鉛筆で書かれた、美術を目指している学生さんで小っちゃい頃から絵や美術の勉強をしてすごく葛藤してるという。美術と音楽と芸術の世界として非常に近いところにあるので、そのプロになるということで葛藤している人たちのいろんな物語を本には書いてあるんですけども、読んで非常に励まされたというお手紙を戴いたんです。今でもすごく覚えているんですけども、大阪の方だったんじゃないかしら。それを読んだ時にいろんな批判はあったんですが、あの本に対しては。すごく嬉しくて、ああこの仕事続けていきたいなと思いましたね。それは今でも、例えば私の

本の感想をホームページとかいろいろ書いてくださる方もいらっしゃるんですけど、ご批判ももちろんあるし、読んで傷つくこともあるんですけども、それでもなんか本当に些細な一言で私はすごく励まされています。もしかしたら書いて下さってホームページとかに書いて下さっている方がいらっしゃるかもしれませんが、本当に感謝しております。それがさっきまで泣いていたのになんかこう泣き止んで、ああもう1日生きていけるかなと言う勇気に繋がっているんで、それぐらい皆さんのお言葉が染みます。

司会の方

ありがとうございます。最相さんの今までのお話だと本当にニュートラルな感じのお心でずっと取材されていたりして、そういうことにはあまり浮き沈みが無いのかなと思ったりしていたんですけども、やっぱりすごく言葉って大事なんですね。

鷺田さん

3年間をここ大阪でお仕事されて、フリーで生きようって、あの踏ん切りはどうしてついていたんですか？

最相さん

東京でも会社勤めしていたので、フリーになろうと思ったのはもう物理的な理由で。一度結婚して失敗したんですけど、一人になったっていう事と、親が病気になりまして介護があったという事と、一番私をどっちにするのって突きつけたのはやっぱり震災だったんですね。阪神淡路の。ここで帰るのか東京で生きるのかどっちにするかというのをすごく迫られて、そこでもうダメだったら帰ろうと思って書いたのが「絶対音感」だったんですよ。あれは応募原稿が本になったものなんです。だから賞を取らなかつたら流れていたという、そういう本なんです。だからそれがダメだったらもう帰るとい、だから踏ん切りというのは、最後の踏ん切りはそこで付けたという感じです。

質問.

iPS 細胞の臨床に成功したというある新聞が誤報を出してしまったと思うんですけども、取材対象に対して嘘というのを最相さんはどうやって見抜くのかなという点と、今のこのような誤報が起きてしまったジャーナリズムに対してどう思われるのかというのをちょっと教えて頂けますか。

最相さん

それは来月10日発売の「Voice」という雑誌に私書いてるんですけど、連載持っていてぜひ読んで頂きたいんですが、そこで書いた事は、私たちの職業というのは常に偽物をつかまされる可能性がある。そのリスクに囲まれて生きているわけです。私はフリーですし、そんなに連絡先を公にしていらないんですが、新聞や週刊誌の現場にいると常にタレコミとか「実はこんなネタがあるでえ」みたいな感じの情報が入ってくるわけですね。そこで大体は嘘だったりするんですけども、例えば「ネタを提供するからいくら払え」みたいなお金の要求があればまだわかりやすいんですけども、今回のケースのMさんは別にお金を要求していないわけですね。だからまずすごく本当かなと思わされるというのが

最初の情報が入った時点であるのかなと思うんです。

その次の段階で、後は科学の分野を取材していないと分からない事というのがいくつか関門があるんですけども、iPSの臨床なんていうのは世界的な事件なわけですよ。それなのに学会のポスター発表というのはちょっとおかしい。ハーバードが記者会見してもおかしくないなという事をまずちょっと違和感を持つわけです。雑誌に発表されるとかサイエンスとかネイチャーとかっていうと、大体緘口令が敷かれるんですよ。注目論文は各新聞社にリリースが流されて記者たちはほぼ同時に受け取るわけです。同時に受け取った時にこれはネタになると思って取材をして雑誌が刊行される同じ日とか直後に記事にするから一誌独占のスクープにはなかなかならないんですね。今回各全紙が皆情報を守っていたわけです。

じゃあそこで何故あの新聞だけが言っちゃったかというのって、またいくつか関門があるんですけども、たぶん今回はノーベル賞で沸いているという世の中の空気というのがすごく後押ししたんじゃないかなと。それは科学取材の現場においても同じで、なんか良いものを届けたい、良い情報を皆さんに知って欲しいという、そういう思いが現場にあって、チェック機構がちょっと弱まってしまったんじゃないかなと。ただあの誤報をした新聞は各紙検証記事を出していますから、それぞれの事情というのは今少しずつ分かるようになってきているので、必ずしも私の言った世の中の空気というのかどうかは言い切れないんですけども。

ちょっと怖いなと思ったのはそれは別に今回の問題じゃなくて、私たちでも他の情報でも有り得ることなんですね。世の中がガーンと沸いている時にもっと良いネタを出したい、というのはジャーナリストの心理ですから、そこでそういう沸き立つものをいかに抑えて客観性を持たせて検証して裏を取るかというところが、やっぱり今回の事件に学ぶとしたらジャーナリストはそこかなという気がするんです。プロとしてのいろんなチェック機構を経ても、だけどいってしまう時ってあるっていう、なんかちょっと詳しくは読んで下さい。

鷲田さん

本当にありがとうございました。自分の中でも納得に納得出来たので嬉しかったです。発見があって。これ3度目なんですけど、毎回全部来て頂いている方もあるかと思いますが、一言一言いろんな言葉、私たちが当たり前のように使っている言葉というのを、実際その言葉を生きてきた人から直に聞くと、その言葉の厚みというか、僕ら普段見えていないところでどんな苦労が実はあるのかという事が本当によく分かってきて、言葉ほぐしというのは正にそういう何でもない、普段当たり前のように使っている言葉の中に実はどれだけのものが込められているのか、それを体験している方にいつもゲストに来て頂いているんですが、今回も本当に「わかる」という言葉をほぐせて良かったと思います。ちなみにまたどうでも良いことなんですけど、前回、後で分かってびっくりしたんですが、前回増田明美さんだったんですが、ご夫婦でもの凄く仲良しでしょっちゅう食事とか行かれて、マラ

ソンも。

最相さん

主人はマラソンで、私は自転車を。

鷺田さん

競輪はしないですか？

最相さん

競輪はしないです。

鷺田さん

偶然で、前回・今回そんな親しいお二方だったとは知らなかったものですから、これも最相さんのお仕事の意外なものに実は繋がっているという。「青いバラ」と「東大応援部」くらいびっくりしました。ということでご報告を申し上げます。

最相さん

ありがとうございました。

鷺田さん

今回は最相さんと同じようにまだこの近くで働いてらっしゃる作家の津村記久子さんという方に今度のテーマは「働く」、働きながら仕事をずっと作品を、全然違うお仕事をやってらっしゃる方なので、きっと繋がりがああると思うんで楽しみにしています。

おわり